

韓国の新女性研究の軌跡と今後の方向性

申 東 洙

目次

- I. 序論
 - 1. 研究目的
 - 2. 研究方法
- II. 新女性の定義
 - 1. 新女性の意味
 - 2. 新女性研究の意味
- III. 近代女性史の研究の流れ
 - 1. 女性史研究の胎動— 1950～1960年代
 - 2. 産業化による女性地位向上の動き— 1970年代
 - 3. 民衆女性を主体とする近代女性研究— 1980年代
 - 4. 本格的な近代女性研究への道— 1990～2000年代
- IV. 新女性研究の現状と課題
 - 1. 女性文学
 - 2. 近代性とアイデンティティ
 - 3. 性 (sexuality) と恋愛
 - 4. 家庭と結婚
 - 5. その他の新女性研究分野
- V. 結論

I. 序論

1. 研究目的

韓国における近代女性の研究は多様な分野から行われてきた¹⁾。特に韓国の近代女性の研究は、当時の韓国の近代が持つ特殊性のため、それを念頭に置いた研究が主に行われてきた。当時の近代女性は家父長制のような封建制度の打破や植民地からの解放、資本主義の時代の到来など、急変する世界情勢の中で自分たちの「性」と「アイデンティティ」、あるいは「民族」と「思想」のような問題意識を解決しようと試みた。それで近代女性に関する研究は自然に以上のような研究テーマを中心に行われてきたと言える²⁾。

本研究では近代女性の中でも、「新女性」と呼ばれた一群の女性たちに関する研究の今までの流れ及び現状と課題を探ってみたいと思う。当時の新女性は、1920年代に入ってから自ら女性解放理論を展開し、さまざまな

文学作品や芸術活動を通して彼女らの価値観と意識を確立した存在であった。当時の朝鮮の女性の中で新女性の割合は決して多数を占めたとは言えないが、その影響力と波及力は大きかった³⁾。従って近代女性を研究するにあたって新女性の研究は欠かせない主要なテーマであると言えよう。

以上の状況を踏まえて本研究では本格的な日韓の新女性を比較する前に、その前段階として韓国の新女性研究の現状と課題を探ってみたい。

2. 研究方法

本研究は日韓新女性の比較研究を行うために、その前段階として韓国の新女性の今までの先行研究の検討を通して新女性研究の現状とこれからの課題を提示するものである。時代別およびさまざまな分野の先行研究を利用して分析を行いたいと思う。

本研究の構成であるがまず、IIでは新女性の意味と新

女性の研究が持つ意味を分析する。Ⅲでは韓国戦争以降「1950～1960年代」、「1970年代」、「1980年代」、「1990～2000年代以降」に分けて全般的な近代女性の研究状況とその傾向を時代別に探ってみることにする。時代区分は、女性史研究が当時の社会・経済的状況と相まって展開していた女性運動や女性研究とその軸を一緒にするため、それに従って行った⁴⁾。Ⅳでは、1980年代から本格的かつ数多くの研究が行われている新女性研究の流れと動向を探ってみることにする。「女性文学」、「近代性とアイデンティティ」、「性 (sexuality) と恋愛」、「家庭と結婚」、「その他の新女性研究分野」の5つの主題に分けて検討を行う。それから、時代別の新女性研究の成果をまとめて、その研究の各争点を考察する。

Ⅱ. 新女性の定義

1. 新女性の意味

新女性は1900年代前半に、イギリスをはじめ、ヨーロッパの諸国や朝鮮、アメリカ、日本、中国、台湾、など世界の各地域で出現した。世界的な社会文化現象とも言えよう。しかし、新女性の概念は未だに明確ではないのである。新女性という概念は時代と状況によってその意味が流動的に規定されて変化し続けて来たと言うことができよう⁵⁾。

しかし、今まで議論して来た新女性の概念は大部分が教育または知識の有無によって定義が行われて来た。近代朝鮮において新女性の最も基本的な概念は、新教育である近代教育を受けた女性であり、朝鮮内及び外国で近代的教育を受けた女性たちを意味するのである⁶⁾。

一方新女性という呼称は、当時「新式女子」、「新進女子」、「新女子」、「新女性」などの多様な呼称が存在していたが、1920年代前半は「新女子」、後半以降は「新女性」に統一される傾向がある。また、新女性の具体的な存在様態は社会運動家 (婦人運動家)、職業婦人、無職者、新家庭婦人、女学生などに分けられる⁷⁾。

2. 新女性研究の意味

1960年代に入ってから朝鮮近代女性史研究が本格的に開始され、独立運動家女性中心の歴史研究が行われた。反面、民族の解放に直結しない「個」としての女性の自由と解放の問題は長く疎外された。周辺化されてきた女性史の中でも、新女性の研究はさらに周辺に位置付

けられていた。同時期の男性知識人の言説によって「逸脱、放縦、虚栄、奢侈、現実からの乖離」というイメージを付与された新女性に対する研究はタブーであった。

韓国社会の歴史的発展と連動する新女性の研究は、民主化とフェミニズム運動の高まりの中で、自由な思索と方法的模索を可能にした。また、タブーであったセクシュアリティの問題も学問の対象になり、「個」としての女性の解放をも重視されるようになった。

さらに、植民地の現実における新女性の生にも注目した。近代の受容と主体形成における伝統社会・家族との葛藤、また、民族独立のための闘いと女性個人の自由平等のための闘いと葛藤、総督府への抵抗か協力かをめぐる葛藤。現実にはその葛藤は絡み合い変化し、複合的に存在していた。それゆえ、新女性における「近代」、「民族」、「ジェンダー」、「アイデンティティ」などの問題は、固定的枠組みではなく、流動する総体的関係性の中で捉えるべきであると思う⁸⁾。

Ⅲ. 近代女性史の研究の流れ

1. 女性史研究の胎動— 1950～1960年代

1950～60年代の韓国は、朝鮮戦争と分断を経て全体的に保守的な状況におかれていた。そのため、女性問題に関する議論それ自体が消極的に行われていて、当然、女性研究の成果も乏しかった。特に、この時期の近代女性史の研究は当時の女性たちにとって自分たちの問題と繋がっていたため、簡単に接近することができる事案ではなかった。

しかし、1950年代後半から梨花女子大学の「韓国女性文化論争⁹⁾」を中心に女性に関する研究と著書が出始めた。ところが、このような研究は問題に対する根本的な接近よりは、関心を示すという程度であった。

1960年代に至っては「亞細亞女性研究¹⁰⁾」が刊行されて、家族に関する研究も始まった。また、この時期には植民地下の女性運動や女性団体の活動や、3.1運動の以降の女性運動分野の研究が行われた。また、女性教育に関する興味が高くなり、教育関連の研究も行われるようになった。

このように1960年代までの近代女性史の研究は始まったばかりの状況であったが、家族、女性運動、女性教育の分野に興味を深めていった¹¹⁾。

2. 産業化による女性地位向上の動き— 1970年代

1970年代から始まった産業化過程を通じて女性の社会進出も本格化した。このような社会変化と相まって、女性労働者や教育を受けた中産層の女性たちは女性問題に興味を持つようになり、男女不平等の問題を解決しようと試みた。また、この時期には西欧の多様な女性解放論を扱った著書が翻訳されて紹介された。この時期の代表的な成果として1977年、梨花女子大学で女性学講座が開設され、1975年にはメキシコ世界女性大会を契機に第3世界女性解放論が紹介された。このような状況の中で、一層深化した近代女性の女性労働や女性教育、女性運動などに関する多様な研究が扱われるようになった。

女性教育の分野では、開化期から植民地時代までの近代女性教育の流れに関する研究を始め、近代女性教育論と『独立新聞』などが当時の女性に与えた影響を分析する研究が行われた。また、植民地下の韓国女性の教育政策とそれに対する抵抗に関する研究が、主に肯定的な立場から試みられた。

さらに1970年代は女性労働者の増加と彼女らの労働運動の活性化によって、植民地下の女性労働者の就業実態など、近代女性の労働に関する研究も行われるようになった¹²⁾。

3. 民衆女性を主体とする近代女性研究— 1980年代

1980年代には民主化運動の影響で民衆女性が主体になる女性運動が展開された。女性運動の分野では、何よりも過去の中産層や知識層の女性のようなブルジョア的な女性運動から脱皮して、民衆女性のための、民衆女性を主体とした様々な運動に分化して行った時期であった。

このような状況は女性史研究にも影響を与えた。民衆女性を歴史発展の主体として捉える観点が台頭し、女性史は基本的にフェミニズムの観点を踏まえた女性研究であると定義をされた。特に植民地下の社会主義の女性運動に対する関心が再考され、さらには一般女性の日常生活や経験の領域まで関心が広がっていた¹³⁾。また、1980年代の時代状況と相まって近代女性史の研究は女性運動史の分野でも著しい成果を上げた。三・一運動を始め、植民地下の多様な近代女性運動を主題にした研究が行われたのである。

さらに、この時期には女性観と女性意識に関する研究

が多く行われた。特にこの時期から植民地期の新女性の社会認識や恋愛、結婚問題、新女性の役割葛藤に関する研究が行われ始めた。しかし、1980年代の新女性の研究は本格的な研究と言うよりは、まだまだ現状を紹介する段階に留まっていた。そして、この時期には、女性教育と女性労働の研究が1970年代の研究成果に基づいて本格的に行われた¹⁴⁾。

4. 本格的な近代女性研究への道— 1990～2000年代

女性研究は1990年代に入ると既存研究に基づいた成果を蓄積して、多くの研究者たちを排出するようになる。この時期には、女性学に関連した数多くの国内の研究者が排出し、また海外からも女性学関連の多様な学位をもらった研究者たちが帰国するようになった。それで、女性に関する研究が急増し、その成果が蓄積されていった。特に研究者たちの増加によって各大学に研究所が設立されるようになり、地方でも地域女性の問題や地域女性の研究を目的にする団体が現れた。

以上の状況に基づいて1990年代に入ってから、さまざまな分野にわたって活発な近代女性の研究が行われるようになった。特に独立運動家や新女性として代表される女性人物に関する研究が多く行われた。また社会主義の女性運動家にも注目するようになった。

さらに1990年代には新女性研究が激増する。新女性とみなされる各個人の思想と行動や作品の分析をはじめ、新女性のイメージの背後にある同時代の言説分析や家父長制、植民地、民族主義、社会主義、近代主義、フェミニズム、セクシュアリティ、近代的主体形成などの、さまざまな問題と関連付けて、新女性を再検討しながら本格的な研究が行われるようになった。

次には、1990年代に入って、日本軍「慰安婦」問題の実状を糾明して諸問題を解決しようとする動きが本格的に現れ、「慰安婦」問題に対する関心が起こった。「韓国挺身隊研究所」と「韓国挺身隊問題対策協議会」の研究者や活動家を中心にたくさんの研究者たちが参加して、日本軍の慰安婦政策の本質、軍慰安婦の実態及び特性、実状と真相などを明らかにしようと試みた¹⁵⁾。

2000年代からは国内外の多くの研究者たちが排出していく。それで、新女性を眺めた男性知識人の視点を女性主義的に問うことになる。また、新女性を全地球的な現象として捉え、西洋、東洋、韓国の女性史研究者たちが集まって朝鮮の新女性を比較史的に検討する研究も活

発に行っている。そして、最近社会主義系列の新女性や「親日派」新女性についての研究がようやく開始されるようになった¹⁶⁾。

IV. 新女性研究の現状と課題

新女性は近代の産物ということができよう。男女平等や恋愛の自由、女性解放、封建制度の打破のような近代的価値観と新女性は不可分の関係である。それで、新女性研究は当時の多様な思想から影響を受けた彼女らの価値観とアイデンティティに対する研究が数多く行われて来た。さらに、最近ではジェンダーの観点から性と恋愛、家族や結婚などのテーマを中心にする研究が数多く行われている。

従って、本研究は「女性文学」、「近代性とアイデンティティ」、「性 (sexuality) と恋愛」、「家庭と結婚」のテーマを中心に新女性の研究がどのように行われているか、また何を明らかにし、どのような課題を残しているかを分析する。

1. 女性文学

初期の新女性研究では小説のような文学作品の中に描かれた女性を通して新女性を論じた。また、新女性の文学作品や創作活動を通じた女性の意識に関する研究が行われた。新女性の作品、または新女性が登場する当時の文学作品を通して彼女らの価値観やアイデンティティを把握しようと試みたものである。主に女性文学界の研究が多かった。

李南錦 (イ・ナムグム) は「韓国近代における〈女性〉：新女性をめぐる」という研究で、李光洙 (イ・グァンス) の『無情 (ムジョン)』と羅蕙錫 (ナ・ヘソク) の『瓊姫 (ギョンヒ)』、そして朴婉緒 (パク・ワンソ) の『母の杭』などの文学作品を通して当時の新式教育を受けた新女性たちが彼女らの価値観をどのように発現しようと思っていたかを探っている。また、李南錦は彼女らの意識の発現において、当時の時代状況による限界も存在していたことを指摘している¹⁷⁾。チェヘシルは代表的な韓国の新女性の作品を通して彼女らの性と恋愛観を明らかにした¹⁸⁾。グォンボドレは近代の数多くの文学作品を分析して新女性を含む、当時の女性たちのいろんな恋愛様相を把握した¹⁹⁾。

2. 近代性とアイデンティティ

キムギョンイルは新女性概念の定義とその変遷、民族主義とフェミニズムをめぐる新女性のアイデンティティの問題や性と恋愛、身体と短髪、スポーツ、消費と流行、知識と教育、仕事と職業など、多様な領域にわたって分析を行った。この研究は、特に二つの側面に重点を置いた。第一は、近代性を踏まえて新女性の分析を試みたことである。第二は、この時期の新女性を東アジアの観点から把握しようと試みたことである。また、この研究は新女性に関するさまざまな議論に独自の意味を付与し、それを理念によって分けて考察を行った。さらに、その諸議論が持つ、植民地状況下における歴史の意味とその変化様相を分析し、整理した点に意義がある²⁰⁾。

ユンヘウォンは近代化による日韓新女性の自我意識や行動様式を考察した。両国女性の自我意識の発達過程の類似点と相違点は何であるか、また、その原因と結果は何であるかを分析した²¹⁾。またグォンヒョンは雑誌「新女性」を利用して、新女性の議論を通して当時の新女性の心性を近代性と結びつけて分析を行った。

ヨンヒョスクは東アジアの近代化は、内発的な西欧の近代化とは違って、外発的なものであると主張した。そのような外発的な近代化を成し遂げた東アジアの中でも、日本と中国とはまた違う植民地朝鮮の近代女性たちの自意識や彼女らの主体性の分析を行った。ヨンヒョスクは当時の朝鮮の新女性は民族意識と女性としての自意識が、調和がとれなくて彼女らの意識と自我は分裂したと主張した。それ故、新女性は多重的であり多層的な自意識を持つと解釈し、朝鮮の新女性ならではのアイデンティティを明らかにした²²⁾。

3. 性 (sexuality) と恋愛

近代的な改造と解放という影響は一番私的な領域である性 (sexuality) と恋愛の面でも例外ではなかった。性と恋愛の問題は当時の社会と世論や、支配権力に関する公共の争点と文化的交換にも影響を与えた。それ故に、新女性の研究の中で数多くの研究が行われている分野は性と恋愛の分野であると言えよう。

ソヒョンシルとチェヘシルは韓国の代表的な新女性たちの生と作品を通じて彼女らが持っていた恋愛観を記述しているが、一部の新女性に限っているのが限界である²³⁾。シンヨンスクは1920～1930年代の代表的な雑誌

である『新女性』、『女性』などの記事を分析して新女性の自由恋愛を基にして結婚観、夫婦観などを記述している²⁴⁾。

イミョンソンは、雑誌の『新女性』と『別乾坤』を利用して抑圧と無知、伝統的な慣習や経験、呪術などに代表される既存の女性の性を科学と知識に展開していく過程を分析した。しかし、当時の男性知識人は性科学を利用して女性は男性より劣等な存在であり、女性の居場所は家庭であると主張したため、当時の性科学は性に対する科学的探求を標榜するが、実は権力から解放してないことが分かった²⁵⁾。

また、ウジョンミは日韓の新女性の近代意識を比較した「日韓の新女性の近代意識に対する研究」という博士論文で、韓国の雑誌である『新女性』と日本の雑誌である『婦人公論』の記事中心に分析を行った。その記事に基づいて日韓の新女性の近代意識を恋愛観、家庭観、教育観、職業観、社会参与観などの五つの観点に分けて、日韓の新女性の近代意識を比較研究した²⁶⁾。さらに、ウジョンミは、日韓の新女性の恋愛観を比較研究した。この研究も雑誌の『新女性』と『婦人公論』を利用して19世紀の後半に日本に登場した「恋愛観」という言葉と概念が、当時の日韓の新女性を通してどのように認識され、どのように表現されていったかを分析している²⁷⁾。

キムギョンイルは新女性の性的アイデンティティを分析した。性を固定して変わらないものではなく、その社会の脈絡の中で絶えずに変化するものとして捉え、新女性の性と恋愛問題を明らかにしようと試みた²⁸⁾。

4. 家庭と結婚

近代に入って女性生活の変化は著しかった。その中でも女性の生活と密接な関係がある婚姻と家族に対する価値観が大きく変わってきた。イベオンは伝統時代から根強く続いてきた家族制度を変化させる重要な要因として作用した女性の結婚観の変化を通して、この時期の女性の地位を分析した²⁹⁾。

井上和枝は1920～1930年代の朝鮮の新女性がどのように近代と遭遇して、何を選択し、どのように植民地社会の現実の中で女性としての自己確立を志向したかを考察した。具体的には日本と欧米を通じて近代思想と文物に接した新女性が、それを受容して内面化し、植民地という限定された歴史的状況の中で家族制度と恋愛、結

婚、離婚の自由などを主張、実践しようとしたことを明らかにした。また、当時の新女性は国家や男性知識人が要求した「民族としての自己」を拒否し、「女性としての自己」の確立を目指していた。このような大きな立場の差が社会的摩擦を起こした原因としてあげられた³⁰⁾。

キムギョンイルは家族と女性の観念や意識に関する研究を行った。伝統か近代かという片方の観点を選択することではなくて、両方の相互作用という密接な関連の中で、また時代的条件と状況の中で考察しようと試みた。開化期から1930年代までの意識の変化によって、新女性は近代の追求と伝統の批判というイメージから中立的な立場を持つ「現代女性」へ代替されたと主張した³¹⁾。

5. その他の新女性研究分野

新女性に対するまた違う分析としてキムミョンスクの「1920年代の新女性登場背景」という研究がある。この論文でキムミョンスクは新女性の登場を日韓に限ったことではなく、当時の全地球的な現象の一つとして捉えて分析を行った。このような認識の中で植民地と家父長制という二重の抑圧を余儀なくされていた朝鮮の新女性の登場背景とその意義を分析した。このような分析を通して、当時の新女性が受容した西欧のフェミニズム思想も母性主義が強調される社会雰囲気の中で批判の対象になっていったことを明らかにした³²⁾。

キムスジンの「1920～1930年代の新女性談論と象徴の構成」という論文と、キム・ミヨンの「1920年代の女性談論の形成に関する研究—新女性の主体形成過程を中心に—」という論文は主に社会学的理論に基づいて、当時の朝鮮の新女性たちの多様な文化や価値観と関連した談論が、どのように形成して行ったかを明らかにし、またそのように形成された談論を通して新女性の分析を行った。このような新女性に対する諸談論は、啓蒙的近代性の論理に内在している植民性の克服に繋がると主張した³³⁾。

V. 結論

以上のように韓国における近代女性史の研究の流れと新女性研究の現状を探ってみた。まず、IIでは、新女性の定義と新女性の研究を行う意味に対して探ってみた。IIIでは時代別の研究の流れと成果を考察してみて、IVでは「女性文学」、「近代性とアイデンティティ」、「性

(sexuality) と恋愛、「家庭と結婚」、「その他の研究」のように五つの主題を中心に新女性の研究の現状と争点を分析してみた。

しかし本研究で扱った先行研究の検討は、今まで学会で発表されたすべての研究を扱うことはできなかったもので、そういう面では限界があると思う。これからは、本研究では扱うことができなかった数多くの優れた研究を補給して、より良い研究になれるようにしたいと思う。

その意味で新女性の研究のこれからの課題を提示したいと思う。

まず、新女性は前近代社会から近代社会へ移行する変革期を生きていった女性たちであった。また、植民地という特殊な経験の中で近代を迎え、自分たちのアイデンティティを求めようになった。このような特殊な背景を念頭に置いて彼女らの生を捉えなければならないと思う。他の地域の近代女性とは違う歴史的条件に置かれていたからである。

次は、近代に至って女性たちは歴史の前面に出ようになり、また多様な階層の女性たちが歴史の主体として浮上して来た。従って、近代女性史の研究ではさまざまな階層の女性たちを研究しなければならないが、既存の研究は新女性を含む知識層やブルジョア女性に集中しており、民衆女性に対する研究はまだ足りないのが現状である。もちろん、研究対象になる新女性がメインになるのはあたりまえなことだが、彼女らが当時の一般の女性に与えた影響に関する研究は多くない。知識人だけではなく、一般人の女性たちが新女性からどういう影響を受けたかを確認することは、また新女性の影響力と女性研究の重要性を明らかにすることになると思う。

最後に、今までさまざまな分野から新女性の研究が行われてきたことが分かった。しかしその当時、世界的に存在していた新女性などであるにもかかわらず、彼女らに関した比較研究は必ずしも多くない。特に当時朝鮮と日本の新女性は植民地という特殊な状況があり、お互いにさまざまな影響を及ぼしあったと思われる。したがって、日韓両国の新女性の比較研究は欠かせないことだといえよう。本稿では、日本の新女性研究の動向と合わせて比較することができなかったが、これからの課題にする。

注

1) 近代女性に関する研究は女性運動や女性労働、軍慰安婦問

題、女性教育、セクシュアリティ、新女性など、韓国戦争(1950~1953)の後から様々な分野で研究が行われてきている。

- 2) イソンヒ (이승희), 「韓国の近代女性史研究の成果と課題」、『女性と歴史』第6集、韓国女性史学会、2007、pp51~52.
- 3) 実際、新女性の文学作品や雑誌及び新聞の記事、彼女らの芸術活動などは、数多くの議論が行われて話題を起こした。
- 4) 時代別の一般的な研究傾向に関してはイソンヒの研究(2007)と韓国女性研究会女性史分科の「韓国女性史の研究動向と課題—近代編」(1994)を参考とした。
- 5) ジョヘヒョン、「韓日の近代新女性の比較研究—女性誌の『新女子』と『青鞜』を中心に—」、京畿大学大学院日語日文学科修士学位論文、2003、p27.
- 6) シンヨンスク、「日帝下の新女性の恋愛結婚問題」、『国語学報』、第12号、1986.
チェスクギョン他、「韓国女性史の定立のための人物の類型研究Ⅲ—3.1 運動の以降から解放まで—」、『女性学論集』第10集、1993.
- 7) 井上和枝、『朝鮮「新女性」における「近代」・「ジェンダー」・「民族」・「親日」』朝鮮史研究会第49回大会講演のレジュメ参考。
- 8) 井上和枝、上掲書参考。
- 9) 1958年5月、梨花女子大学で出版した。女性をテーマにして文化、芸術、歴史など、多様な分野の議論を扱っている。
- 10) 1962年、淑明女子大学で刊行。
- 11) イソンヒ、上掲書、pp53~54.
- 12) イソンヒ、上掲書、pp55~56.
- 13) 韓国女性研究会女性史分科、「韓国女性史の研究動向と課題—近代編」、『女性と社会』、韓国女性研究所、第5号、1994、pp297~298.
- 14) イソンヒ、上掲書、pp57~58.
- 15) 韓国女性研究会女性史分科、上掲書、p298.
- 16) イソンヒ、上掲書、pp59~61.
- 17) 李南錦、「韓国近代における<女性>:「新女性」をめぐる(イギリス共同ゼミ)」、『日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成』、お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」事務局、2010.
- 18) チェヘシル、「新女性の告白と近代性」、『女性文学研究』第2号、韓国女性文学学会、1999.
- 19) グォンボドレ、「恋愛の形成と読書」、『歴史問題研究』第7号、歴史問題研究所、2001.
- 20) キムギョンイル、「女性の近代、近代の女性—20世紀の全般期の新女性と近代性」、プルン歴史、2004.
- 21) ユンヘウォン、「日韓開化期の女性の比較研究—自我意識の近代化過程を中心に—」、『亞細亞女性研究』第14号、淑明女子大学アジア女性研究所、1975.

- 22) ヨンヒョスク、「東アジアの文化の中の韓国の近代女性の自意識—1920～1930年代の韓国の近代女性を中心に—」、韓国女性哲学会の発表文、2007.
- 23) ソヒョンシル、「日帝時期の新女性の自由恋愛論」、『歴史批評』第2号、1994.
 チェヘシル（1999）、上掲書.
- 24) シンヨンスク、「日帝下の新女性の恋愛結婚問題」、『国語学報』、第12号、1986.
- 25) イミョンソン、「植民地近代の性科学の談論と女性の性（Sexuality）」、『女性健康』第2巻第2号、大韓女性健康学会、2001.
- 26) ウジョンミ、「日韓の新女性の近代意識に対する研究」、慶尚大学大学院日本学科博士学位論文、2009.
- 27) ウジョンミ、「日韓の新女性の恋愛観の研究」、『日本語教育』第37号、韓国日本語教育学会、2006.
- 28) キムギョンイル、「日帝下の新女性研究—性と愛の問題を中心に」、『社会と歴史』第57号、韓国社会史学会、2000.
- 29) イベヨン、「開化期・日帝時期の結婚観の変化と女性の地位」、『韓国近現代史研究』第10号、韓国近現代史学会、1999.
- 30) 井上和枝、「韓国新女性と近代の出会い」、『日韓歴史共同研究報告書』第5号、日韓歴史共同研究委員会、2005.
- 31) キムギョンイル、「韓国近代社会の形成での伝統と近代—家族と女性の観念を中心に—」、『社会と歴史』第54集、韓国社会史学会、1998.
- 32) キムミョンスク、「1920年代の新女性の登場背景」、『同徳女性研究』第11号、同徳女子大学学生生活研究所、2006.
- 33) キムスジン、「1920～1930年代の新女性談論と象徴の構成」、ソウル大学大学院社会学科博士学位論文、2005.
 キムミョン、「1920年代の女性談論の形成に関する研究—新女性の主体形成過程を中心に—」、ソウル大学大学院国語国文学科博士学位論文、2003.

参考文献

- イソンヒ（이승희）、「韓国の近代女性史研究の成果と課題」、『女性と歴史』第6集、韓国女性史学会、2007.
- 井上和枝、『朝鮮「新女性」における「近代」・「ジェンダー」・「民族」・「親日」』朝鮮史研究会第49回大会講演のレジュメ参考。
- 井上和枝、「韓国新女性と近代の出会い」、『日韓歴史共同研究報告書』第5号、日韓歴史共同研究委員会、2005.
- 韓国女性研究会女性史分科、「韓国女性史の研究動向と課題—近代編」、『女性と社会』、韓国女性研究所、第5号、1994、pp297～298.
- 李南錦、「韓国近代における〈女性〉：「新女性」をめぐる（イギリス共同ゼミ）」、『日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成』、お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」事務局、2010.
- イベヨン、「開化期・日帝時期の結婚観の変化と女性の地位」、『韓国近現代史研究』第10号、韓国近現代史学会、1999.
- イベヨン、「日帝時期の新女性の概念と研究史的検討」、『外大史学』第12号、韓国外国語大学歴史文化研究所、2000.
- イミョンソン、「植民地近代の性科学の談論と女性の性（Sexuality）」、『女性健康』第2号、大韓女性健康学会、2001.
- ウジョンミ、「日韓の新女性の恋愛観の研究」、『日本語教育』第37号、韓国日本語教育学会、2006.
- ウジョンミ、「日韓の新女性の近代意識に対する研究」、慶尚大学大学院日本学科博士学位論文、2009.
- キムギョンイル、「女性の近代、近代の女性—20世紀の全般期の新女性と近代性」、プルン歴史、2004.
- キムギョンイル、「韓国近代社会の形成での伝統と近代—家族と女性の観念を中心に—」、『社会と歴史』第54集、韓国社会史学会、1998.
- キムギョンイル、「日帝下の新女性研究—性と愛の問題を中心に」、『社会と歴史』第57号、韓国社会史学会、2000. キムミョンスク、「1920年代の新女性の登場背景」、『同徳女性研究』第11号、同徳女子大学学生生活研究所、2006.
- キムスジン、「1920～1930年代の新女性談論と象徴の構成」、ソウル大学大学院社会学科博士学位論文、2005.
- キムミョン、「1920年代の女性談論の形成に関する研究—新女性の主体形成過程を中心に—」、ソウル大学大学院国語国文学科博士学位論文、2003.
- グォンボドレ、「恋愛の形成と読書」、『歴史問題研究』第7号、歴史問題研究所、2001.
- シンヨンスク、「日帝下の新女性の恋愛結婚問題」、『国語学報』、第12号、1986.
- ソヒョンシル、「日帝時期の新女性の自由恋愛論」、『歴史批評』第2号、1994.
- ジョヘヒョン、「韓日の近代新女性の比較研究—女性誌の『新女子』と『青鞜』を中心に—」、京畿大学大学院日語日文学科修士学位論文、2003.
- チェスクギョン他、「韓国女性史の定立のための人物の類型研究Ⅲ—3.1運動の以降から解放まで—」、『女性学論集』第10集、1993.
- チェヘシル、「新女性の告白と近代性」、『女性文学研究』第2号、韓国女性文学学会、1999.
- ユンヘウオン、「日韓開化期の女性の比較研究—自我意識の近代化過程を中心に—」、『亞細亞女性研究』第14号、淑明女子大学アジア女性研究所、1975.
- ヨンヒョスク、「東アジアの文化の中の韓国の近代女性の自意識—1920～1930年代の韓国の近代女性を中心に—」、韓国女性哲学会の発表文、2007.

